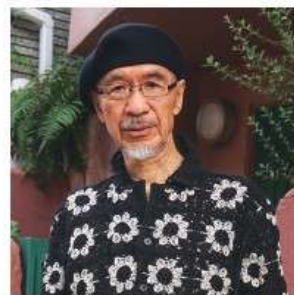


《心の陰》の

解放を求めて

談

末永蒼生
(色彩心理研究家)



すえなが・たみお
1944年東京都生まれ。アートセラピスト、文筆家。株式会社ハート&カラー共同代表、「子どものアトリエ・アートランド」主宰。1960～70年代に「告陰」や「グループ視覚」における表現活動の傍ら、アートの原点である児童美術の心理的調査に関わり、色彩心理研究を行う。主な著書に『色彩自由自在』(昌文社)、『色彩心理の世界』(PHP研究所)など多数。

色彩表現によるアートセラピー

を独自のノウハウで長年実践してきた色彩心理研究家・末永蒼生。実は末永は、1960年代に「告陰」をはじめとする芸術集団を結成し、政治と芸術を横断する表現活動を行っていた。その多岐にわたる活動には、人間の無意識への深い関心が通底している。

人間の無意識やそれを表現する意味について、詳しく話を伺った。

心の陰とは

——末永さんは1967年に芸術集団「告陰」を結成し、街頭パフォーマンスや映像表現を展開しました。「告陰」はどのような意

味を持つ名前なのでしょうか。

「告陰」には、「陰を告げる」「陰の世界から告げる」という意味があります。「陰」とは、人間の無意識の世界や、そこで蠢^{うごめ}いているエロスや食欲といった根源的な欲求、言葉にできない感情や情動のうねりのこと。1960～70年代の「アンデラ」の潮流の中で生まれた「告陰」は、まさに精神の地下を心の陰と捉えていたわけです。当時の僕は結成時の「告陰宣言」にもある通り、人間の原初的な欲望が抑圧されている実感がありました。人間は陰を抑圧し続けると、どんどん息苦しくなって、心が麻痺していきます。そうはなりたくない、生きていることを実感したいと思

うなら、無意識に抑圧している欲望や感情を解放して感じ取らないといけない。そういった危機感が「告陰」の名前に現れています。

——たしかに、ほとんどの人は社会生活を送るために陰を抑圧してしまえますよね。

人間が言語体系を持ったことが一つの原因でしょう。これまで人間は、色々な物事に名前を付け、言語を使って思考し、他者とコミュニケーションを取ってきました。現代社会は言語を前提に構築され、うまく回っている。しかしそれは、言葉にならない無限のエネルギーを意識下に封じ込め、沈黙させてしまったともいえるのです。逆に言えば、言語を持ったことで無意

識が生まれた。言語という理性を持たず、本能で生きている動物には、本能はあってもおそらく無意識がありません。

人間の無意識を解放する

——言語で説明できる領域がすべてだと思い込むと、生きづらくなってしまうそうです。無意識を解放するために、「告陰」ではどのようなパフォーマンスをしていたのでしょうか。

食や性に関するパフォーマンスをしていましたね。メタファーとしてサドマゾ的なイメージも取り入れていました。というのは、人間社会ってかなりSMクラブに似